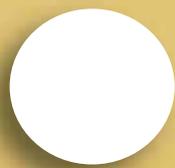




●水菜ちゃん



水菜ちゃんと早瀬くんが
川の水博士とっしょに、
川のこと、水のこと、
勉強します。

川の可能性を いかす

川と地域の
新しいつながりが
見えてきた



●川の水博士

- 第1章
川のはみんなの生活を支えるだけかな？
ほかにもないだろうか？
- 第2章
川には人間を元気にする「いやす力」がある。
その力をいかした川づくりとは？
- 第3章
川に人が集まりはじめ、町の顔になった。
どんなことがあったのだろうか？
- 第4章
川に生き物たちをよびもどすこともだいじだ。
どうすればいいのかな？
- 第5章
川と地域の歴史的なつながりをだいじにすると、
どんな川が生まれるかな？
- +プラス
「川の可能性」をいろいろ勉強しました。
それをまとめてみましょう。



川は「地域の宝」！
川は地域づくりの原点になれるんだ。

病気の人も体の不自由な方も、
健康な人もみんなが親しめる川にしたい！

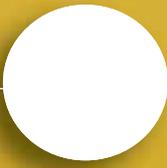
水際の散策路やおまつり広場ができて、
川が市民のコミュニティの場が変わった！

ビオトープやネットワークづくり、
森や河畔林づくりで
豊かな川の自然が広がる！

川の楽しい記憶、
住む人や町との昔からつながりは、
川がもっているパワーなんだ！



●早瀬くん



川のはみんなの生活を支えるだけかな？ほかにないだろうか？



川づくりの新しい視点

博士 ● 早瀬くんに質問しよう。わたしたちの暮らしと川とのあいだにはどんな関係があるかな？

早瀬 ● まず水道かな。飲み水も台所やお風呂、トイレの水もみんな水道の水で、そのほとんどは川の水です。それから洪水。洪水で被害にあったニュースも毎年、目にします。川の自然もぼくには気になるな。

博士 ● 早瀬くんがいった最初のふたつはいわゆる「利水」と「治水」だね。川の水をつかえなくなったら、わたしたちは暮らしていけない。また、安全に暮らすために、堤防やダムを築いて水害を防ぐ安全な川づくりがいまも進められている。

水菜 ● それから「親水」ということばも聞か。河川敷に親水公園をつくって川に親しめるようにもしています。でも、河川敷にはもともと昆虫などの動物が暮らし、植物が育っていたんでしょ。

早瀬 ● 川で暮らす動物や川岸にはえる植物のことも考えてあげないと。

博士 ● 利水や治水、それから河川敷の利用にしても、わたしたち人間は自分たちの都合ばかり考えて、川を利用してきた面もあるね。

早瀬 ● でも、最近は自然にやさしい川づくりが行われていると聞きました。

博士 ● 自然を大切にすることでなく、いろいろな新しい視点から川づくりに取り組んでいるところがふえてきている。

水菜 ● たとえば、どこですか？

博士 ● 島根県を流れる高津川もそのひとつといえる。そこで地域づくりに取り組んでいるグループがある。まず、わたしが会って、どんな考えでどんなことをしているのか調べてこよう。

川からはじまる地域づくり

博士 ● NPO 法人「アンダンテ 21」は、島根県益田市を中心に地域づくりをしている団体とうかがいましたが、高津川との関係は？

吉田 ● もともと都会のまねをした地域づくりはやめようと考えていました。では、なにに頼ればよいのか。はじめは手さぐり状態で、いろいろなことを手あたりしだいに考えました。そして最後に気がついたのが高津川です。でも、いまや高津川は宝の山です。取り組みを進めていくと、高津川にしかない多くの宝が見えるようになりました。

博士 ● 宝というと、たとえばどんなことでしょうか？



●島根県西部を流れる全長81kmの清流、高津川。「高津川は地域の宝」ととらえる人々によって、高津川から地域づくりを考える活動がはじまっている。写真は上から上流、中流、下流。



◎高津川
島根県鹿足郡吉賀町田野原に源を発し、益田市で日本海に流れこむ一級河川。流域面積1,090km²、幹川流路延長81km。流域には3万8,600人が暮らす。



●きれいな水の中かで川遊びを楽しむ子どもたち。「アンダンテ21」では次代の高津川をなう子どもたちに川の体験を積ませる活動を積極的に進めている。



●「高津川下り」実現のために、アンダンテ21では船に乗って実証実験を行った。[写真提供/アンダンテ21]

* NPO 法人「アンダンテ 21」理事長の吉田篤志さんと高津川大学学長の山尾洋樹さんに取材しました。



山尾 ● 第一はすばらしい自然環境です。高津川は全国的にも清流として知られています。そして、アユをはじめ川の恵みに恵まれています。

吉田 ● それから仲間です。ワークショップを通じて、わたしたちは高津川と暮らしてきた人、川のすばらしさを知っている人、これから川に関心をもとうとする人と出会いました。そして、いまでは流域全体に仲間の輪が広がってきました。

山尾 ● 仲間には、子どもたちも入ります。子どもたちと川に行き、「水がき」体験をしています。最初はおそるおそるの子どもも、すぐに川遊びの楽しさに夢中になります。川の自然のなかで遊び、感動した子は、きっと高津川の水環境をまもってくれますよ。将来の高津川を考えると、子どものうちに高津川で遊んだ体験を積むことは重要です。

博士 ● 自然豊かな高津川がそこに流れているだけとしか見えませんでした。その川が地域づくりの中核になっていけるのですね。

吉田 ● わたしたちの考える地域づくりは、高津川とともに生活する暮らしやすい地域をつくることです。そのために流域全体の人の輪が必要だし、高津川とその恵みの地域の特産物を積極的に活用することも必要です。そう思って高津川と向き合ってみると、いままで忘れてしまっていた地域と川のさまざまなかわりの姿がふたたび見えるようになってきます。

山尾 ● 2005年に高津川大学を立ちあげたのですが、高津川大学のキャンパスは高津川です。高津川を地域の「交流のステージ」にしたいのです。高津川の歴史、文化を再認識して21世紀の川と人間を考え、森・川・海がつながった豊かさを情報発信することを目的にしています。

吉田 ● ほかに昔さかんだった舟運の復活をめざしています。実際に船に乗って実証実験も行いました。これは、津和野や萩と連携して新しい観光資源を考える活動のひとつに位置づけています。

川の可能性をいかした地域づくり

水菜 ● 「アンダンテ 21」のみなさんは、川を中心にいろいろなことを考えているんですね。

早瀬 ● 川ではさまざまなことができるし、川からはいろいろなアイデアが浮かぶという印象ですね。

博士 ● 川には川づくりや地域づくりを進める力があるし、きっかけにもなる。ちょっとむずかしいけれど、それを「川の可能性」とよんでもいい。川の可能性をいかすには、川の個性を知り、個性をのばすような視点やアイデアが必要だ。そして、なによりだいじなのは地域の仲間たちの熱意だと思う。「アンダンテ 21」の地域づくりはその一例といえそうだね。

川は「地域の宝」！ 川は地域づくりの原点になれるんだ。

川には人間を元気にする「いやすカ」がある。その力をいかした川づくりとは？



なぜ？
なぜ？
BOX
川の水調査隊

博士 ● 川に注目しているお医者さんがいることを知っているかな？

早瀬 ● お医者さんと川？ なにか関係があるんですか？

水菜 ● 病気の人も川に行くと、病気が治るのかしら？

博士 ● 病気を治療したり、苦しみ、悩みなどを治すことを「いやす」というのだが、いま、川の「いやすカ」に関心をもつ人がふえている。川を整備するときにも、川のいやす効果を考慮するようになった。じつは、秋田県由利本荘市ほんじょうの本荘第一病院では、10年ほど前から、そばを流れる子吉川を治療に取り入れているそうだ。水菜ちゃん、院長の小松寛治先生に川のもつ「いやすカ」について、お話をうかがってきいてくれないかな。

川を眺めていると心がやわらぐ

水菜 ● こんにちは、小松先生。先生の病院では、子吉川を入院している患者さんの治療に役立っているのですか？

小松 ● はい、水菜ちゃん、そうなんです。本荘第一病院は子吉川のすぐそばに建っているの、病室からは川がよく見えます。わたしたちは、患者さんがこの川をよく眺めていることに気づいたんです。アンケートもとりましたが、それによると50%近くの方が1日に何回も川を眺めて、約90%の患者さんは川を眺めると「心がやわらぐ」と答えています。1997年から、患者さんを子吉川に連れて行く活動をはじめました。

水菜 ● 薬や注射のように病気を治すのですか？

小松 ● 川だけで病気が治るわけではありません。治療にはまずお薬や、場合によっては手術が必要です。同時に病院は、患者さんができるだけ早く治る環境を提供しなければいけません。その点で、川は役に立ちます。

水菜 ● なにか効果があるんですか？

小松 ● 毎日、川で散歩した患者さんのなかには、薬に頼らずよく眠れるようになった人もいます。病氣と闘う気持ちが強くなった人や会話を楽しむようになった患者さんもいます。積極的に川を利用した患者さんは、そうでない人に比べて、いずれの面でも改善効果が認められます。わたしはそれを「川のいやすの効果」とよんでいます。

いやすカのもとは？

水菜 ● 入院患者の方は、病院の裏に広がる子吉川の「せせらぎパーク」を散歩したりするんですか？

●花を摘み、子吉川のほとりで語り合う患者さんと本荘第一病院のスタッフのみなさん



●本荘第一病院から眺めた子吉川のせせらぎパーク。



◎子吉川癒しの川整備事業
1999～2001年に、国が河口から約3.5～4km上流の子吉川左岸河川敷を基盤整備。トイレ、あずまやなどは本荘市が設置し、2002年5月にせせらぎパークとして開場。さらに2003年には、幅3m、親水部14m、延長612mのせせらぎ水路が整備された。



●子吉川はカヌーのさかんな川で知られる。カヌーの浮かぶ光景も、患者さんの心をやわらげてくれる川の光景だろう。



●せせらぎパークにつくられた「せせらぎ水路」。車いすのまま、水路に入れるようになっている。[以上4点の写真提供/本荘第一病院]



●荒川の河川敷につくられた「あらかわ福祉体験広場」。車いすの体験ができる。



●子どもやお年寄りも安全に水際に行けるように、こう配がゆるやかで広い階段。手すりも上下にふたつついて、安全性に配慮している。岩瀬地区にて。

◎「福祉の荒川づくり」
国土交通省荒川下流河川事務所が、高齢者や障害者の方たちがだれでも安心して訪れ、安らぎがえられるように、1997(平成9)年度から荒川下流で取り組んでいる事業。安全で使いやすい施設整備などを、病院、福祉、教育関係者など幅広い市民と意見交換しながら進めている。

小松 ● そうです。「せせらぎパーク」は国土交通省の秋田河川国道事務所と本荘市(現由利本荘市)と住民が議論を重ねて、「子吉川癒しの川整備事業」として実現したものです。川が心身に与えるいやす効果を考えてつくられました。患者さんたちはせせらぎパークを徒歩や車いすで散歩するのを楽しみにしています。市民の方もたくさん集まってきましたよ。

水菜 ● 最後にひとつだけ、質問していいですか？ 川にはどうして、わたしたちをいやすしてくれる力があるんですか？

小松 ● むずかしい質問ですが、わたしの考えでは、人と川との関係には長い人類の歴史があります。最初の生命は水のなかから誕生し、人類の文明は川のそばで興りました。そして、わたしたちひとりひとりにも川の思い出があるでしょ。ふだんは気づかないかもしれませんが、わたしたちと川のあいだには深い絆きずながあります。だから、川岸に立つと川の景色、におい、流れの音、風の感触が脳を刺激して、川で出会った思い出だけでなく空想や想像も広がり、それがいやすにつながっていくのだと思います。

体の不自由な方にもやさしい荒川の川づくり

早瀬 ● 小松先生のお話を聞くと、川のふしぎな力に感心してしまうな。川のいやす力は病気の方だけでなく、健康な人にも効果がありそうですね。

博士 ● そのとおりだ。広々とした川、子どもたちが魚とりできる小さな川、川に行くと心も体もリフレッシュできる。だから、だれでも親しめる川にしたいものだね。水害を防ぐために高い堤防をつくった川でも、だれもが川に親しめる川づくりが行われている。東京都を流れる荒川では、車いすの人が水際まで行きやすいようにゆるやかなスロープにした。

早瀬 ● 階段も傾斜がゆるいと歩きやすいし、小さな子どもやお年寄りには手すりもあったほうが安全ですね。

博士 ● 荒川ではそういう点に力を入れて、国や地元のみなさんが何回も議論を重ねて「福祉の荒川づくり」整備を進めている。なかでもユニークなのが、河川敷につくられた「あらかわ福祉体験広場」だ(56ページ参照)。これは一般の人に車いすを体験してもらおう施設で、「児童や若人が他人へのいたわりを学ぶ——思いやりの荒川」という考えからつくられた。みんなにも、ぜひ、体験してもらいたい。すでにたくさんの小中学生、高校生が校外授業でやってくるそうだ。

病気の人も 体の不自由な方も、 健康な人も みんなが親しめる 川にしたい!



川に人が集まりはじめ、町の顔になった。どんなことがあったのだろうか？



なぜ？なぜ？BOX
川の水調査隊

●真岡市の中心部を流れる五行川。「水辺のコミュニティゾーン」区間の広い河川敷はおまつり広場(上)として利用されている。



●夏祭りのみこしは、おまつり広場から五行川に入る。広場にはたくさんの人が集まる。[写真提供/真岡市役所]

ふるさとの川整備事業

博士 ●川はわたしたちにたくさんの恵みを与えてくれるけれど、水害だけはこまるね。

水菜 ●そのために、堤防を高く強くしたり、上流にダムを建設したり、遊水地をつくったり、いろいろな治水工事を行っているんですよ。

博士 ●その治水工事と人々が親しめる川づくりを同時に行い、水辺と一体となった町づくりをめざす事業も進められている。これは国土交通省が推進している事業で、「ふるさとの川整備事業」とよばれている。

早瀬 ●その事業は、どこの川で行われているんですか？

博士 ●栃木県の真岡市を流れる五行川もそのひとつだよ。この川は「ふるさとの川整備事業」で生まれ変わったといわれている。早瀬くん、五行川がどんなふう生まれ変わったか、話を聞きに行ってください。



●「ふるさとの川整備事業」による整備が行われる前の五行川。水際に近づきにくい川だった。[写真提供/栃木県真岡土木事務所]



川が町の顔になった

早瀬 ●細島さん、こんにちは。五行川のことを教えてください。

細島 ●栃木県真岡土木事務所の細島です。五行川では1990(平成2)年から2001年まで「ふるさとの川整備事業」が実施されました。川底を掘り下げて洪水が安全に流れるようにし、3.3kmの区間を下流から3つのゾーン「水辺の情緒とふれあうゾーン」「水辺のコミュニティゾーン」「潤いとゆとりの住環境」に分けて整備しました。そのひとつ「水辺のコミュニティゾーン」には、水際にそった散策路や広い芝生を利用したおまつり広場を整備しました。

早瀬 ●散策路にはウォーキングをしている人がたくさんいました。おまつり広場というのは、どんなことが行われるのですか？

細島 ●7月の夏祭りでは、ここからおみこしが川のなかに入り、夜には花火大会も行われ、15万人も集まるといわれるくらいにぎわいます。

早瀬 ●以前からそうだったんですか？

細島 ●いいえ、以前は急傾斜の護岸だったため、川には近づけなかったんです。それが「ふるさとの川整備事業」により、川の安全性が高まり、その一方で市民が親しめる水辺空間に変わりました。いまでは子どもたちが水辺で遊んでいますし、人々が集まるようになりました。広くなった河川敷



●「潤いとゆとりの住環境」(上)と「水辺の情緒とふれあうゾーン」(下)。



◎五行川
栃木県さくら市旧氏家町付近を源とし、真岡市を流れ、茨城県筑西市で利根川水系の小貝川に合流する。延長52.4km、流域面積279.0km²。



●河岸には市民が育てている花壇がある。



●「鮭守の会」メンバーによるサケの捕獲。[写真提供/真岡市役所]



●ふ化育成場でふ化、育成し体長5cmになったサケの稚魚は、3月に放流される。[写真提供/真岡市役所]

◎ふるさとの川整備事業
治水施設の整備と水辺空間の整備を川づくりのなかで一体的に行うことで、水害による被害の軽減と地域生活環境の向上をめざす国土交通省の公的支援制度。

* NPO法人「鮭守の会」会長の黒子幸雄さん、柳田耕太さん、会員のみなさんに取材しました。



と町なみの景観もなじんできました。

早瀬 ●みんなの憩いの場所になったんですか？

細島 ●そう、いえますね。川がコミュニティの場になってきました。町の人も自主的に川の清掃をしたり、河岸に花を植えたりしています。それだけ市民の川になり、町の顔にもなってきました。2003年、五行川でサケの遡上^{そじょう}が確認されたんですよ。そのサケをふ化させているグループがありますから、その方たちにも会ってみるといいですよ。

河口から150km遡上するサケをふ化させる

早瀬 ●黒子^{*}さん、柳田さん、こんにちは。ここは、利根川の河口から150kmも上流なのに、サケがのぼってくるそうですね。

黒子 ●10～11月に、利根川をさかのぼり小貝川を通して途中で密漁にあったりしながら、傷だらけになって延々とここまでのぼってきます。そのサケを見るととてもいとおしく思え、サケのためにも川をだいにしようという気持ちになります。わたしたちはそのころになると朝と晩、サケが産卵しやすいように川底の掃除をします。遡上してきたサケの一部を^お釜でつかまえて、メスから卵を取り出して受精させ、水槽でふ化させて翌年の3月に放流します。

柳田 ●2006年は3月4日に、ふ化させたサケの稚魚3万匹を五行川に放流しました。ガールスカウトの小学生が放流を手伝ってくれました。放流するときは、まず川のゴミ掃除からはじめるんですよ。

早瀬 ●みなさんはどうして、サケのふ化をしようと思ったのですか？

柳田 ●川の整備が終わって、水際には散策路やサイクリングロードができました。そこに、サケがのぼってきたわけですよ。放流したサケは3～4年後にもどってきます。子どもたちはそのサケに会いたいの、川をきれいにすると誓い合っています。子どもたちだけでなく、サケが川に対する市民の意識を変える、それを期待してふ化に取り組んでいます。

水菜 ●わたしもサケの放流をしてみたいな。そして、サケがもどってくるように川をきれいにまもってきたい。

博士 ●川の整備が進んでも、真岡の市民のように地元の人たちが川をだいにしなければ、川は市民のコミュニティの中心にはなれない。その点、五行川はほんとうに生まれ変わりつつあるようだね。

水際の散策路やおまつり広場ができて、川が市民のコミュニティの場になった!

川に生き物たちをよびもどすこともだいじだ。どうすればいいのかな？

水菜 ● 川の水博士、川の自然を取りもどす活動も行われていますよね。

博士 ● 首都圏を流れる荒川では大規模なビオトープ整備が進んでいて、地元の人たちも参加している。ビオトープということばを知っているかな？

早瀬 ● 生き物がすむまとまった場所という意味ですか？

博士 ● 簡単にいうとそういう意味だ。荒川の河川敷にビオトープを整備して、川ぞいに動物たちが自由に移動できる水と緑のネットワークをつくる計画が進んでいる。水菜ちゃん、この計画に参加している埼玉県生態系保護協会の堂本泰章さんを訪ねてごらん。興味深い話を教えてくれるよ。

荒川にたくさんの生き物をよびもどす

水菜 ● こんにちは、堂本さん。荒川ではたくさんの生き物がもどってくるようになる計画が進んでいるそうですね。

堂本 ● こんにちは、水菜ちゃん。昔の埼玉県の平野部には湿地が広がり、いろいろな生き物がすんでいたんですが、埼玉県が発展するとともに、そういう環境は減ってしまいました。でも、荒川の河川敷のなかにはところどころ昔の名残があって、かつての自然環境がかいまみられます。

水菜 ● たとえば、どこですか？

堂本 ● 右の地図を見てください。太郎右衛門地区、三ツ又沼ビオトープがあるでしょ。太郎右衛門地区と三ツ又沼には荒川や入間川の旧流路が残っています。三ツ又沼はすでにビオトープとして整備され、太郎右衛門地区では乾燥化が進む旧流路とまわりの環境の自然再生事業がはじまったところです。すこし上流には荒川ビオトープがあります。ここは河川敷の麦畑だった場所に水路やワンドを整備して、ビオトープにしました。

水菜 ● 荒川の自然を豊かにするには、こういう場所が必要なのですか？

堂本 ● そうです。このような広くまとまった自然地域が自然豊かな地域づくりには重要なのです。まず、この3か所を生き物がたくさん生息する拠点にしたいんです。荒川ビオトープは50ヘクタールもありますが、人間は立ち入り禁止。自然が回復していくようすを継続して調査しています。水菜ちゃんは、サシバという鳥を知っていますか？

水菜 ● えー、知りません。

堂本 ● 夏になると北の国から渡ってくる小型のタカの仲間、この地域の生態系の頂点に立つ生き物です。この鳥をよびもどすのも目標です。サシバがたくさんいるということは、エサになる小動物が多く、荒川の自然が豊かなことを示しています。



● 緑におおわれた荒川ビオトープ。麦畑があった河川敷で1994年から整備がはじまった荒川ビオトープは、人間の立ち入り禁止地域で、たくさんの生き物が暮らしている。

● 自然再生事業
過去に損なわれた自然環境を取りもどすことを目的として、国や地方自治体、NPO、専門家などが参加して進める事業。

● 荒川の旧流路が池になって残る太郎右衛門地区。荒川でも数少ない豊かな湿地環境を保全して、エコロジカル・ネットワークの拠点にする事業がはじまっている。



● サシバ [写真提供/埼玉県生態系保護協会]



1988(昭和63)年にはじまった「お魚殖やす植樹運動」は、上図のように数多くの市町村で毎年行われている。その活動は「漁民の森」として全国的にも知られるようになった。[資料提供/北海道ぎょれん]



● 北海道・羽幌(はぼろ)町の福寿川の岸には、北もい漁業協同組合の手で植樹が進められている。漁港に流れこむ福寿川をきれいになりたいとの願いから、河畔林を育てる計画で植樹された。



● 小学生も参加して行われた「お魚殖やす植樹運動記念の森」での植樹活動。この活動は1998(平成10)年から、当別町の「道民の森」内で北海道漁協女性部連絡協議会のよびかけで6月に行われている。[写真提供/北海道ぎょれん]

水菜 ● それで、サシバはもどってきたんですか？

堂本 ● 残念ながら、もどってきていません。でも、一時すがたを消したホンドキツネが子育てをはじめました。オオタカ、ノスリ、フクロウも見られます。荒川ビオトープは、まちがいなく荒川の生物がすむ拠点のひとつになりました。三ツ又沼ビオトープでは、湿地に育つ植物やトンボ、野鳥に出会えます。木道が整備されていますから、見ていってください。

水菜 ● はい。楽しそうなところですね。

堂本 ● 自然再生事業がはじまった太郎右衛門地区を加えたこの3か所を拠点にして、川や谷戸、斜面林を軸にして互いに結びエコロジカル・ネットワークをつくるのが、いま考えている計画の目的です。

水菜 ● そうなると、動物たちが移動したりできるのですか？

堂本 ● そうです。実際、ホンドキツネは川ぞいに移動して下流でも子育てしているようです。エコロジカル・ネットワークが完成すれば、自然豊かな荒川になります。その次は、街のなかの自然とネットワークを広げていきます。そうすれば街で自然の息吹を感じられるようになりますよ。

水菜 ● すてきですね。わたしたちもそんな街に住んでみたいな。

漁師さんたちが木を植える

博士 ● 野生の動植物が絶滅の危機にさらされているというニュースも多いだけに、いろいろな生き物たちがすむ川を取りもどす試みはとても重要だ。ところで、海で魚をとるのが仕事の漁師さんたちのなかにも、山の森、川、海をまもろうとしている人たちがいる。なぜだか、わかるかな？

水菜 ● 山が荒れると、流れだす土砂がふえて川が汚れる心配があるわ。

早瀬 ● 落ち葉などの栄養分が減って、魚のエサになる生き物が減るからかな？

博士 ● くわしいことはわかっていないが、そういう心配がある。サケは川をのぼって産卵し、ふ化した稚魚が川をくだって海に入る。それだけに、サケがたくさんとれる北海道の漁師さんたちは、川をきれいにしなければという気持ちが強い。「お魚殖やす植樹運動」事務局の話では、漁師さんの奥さんたちが1988(昭和63)年から全北海道でいっせいに「お魚殖やす植樹運動」をはじめた。山奥の森や河畔林を育てるこの植樹活動は現在もつづいており、2006(平成18)年までに約70万本の苗木を植えた。いまでは、見上げる高さにまで育ち、森になったところもあるそうだ。

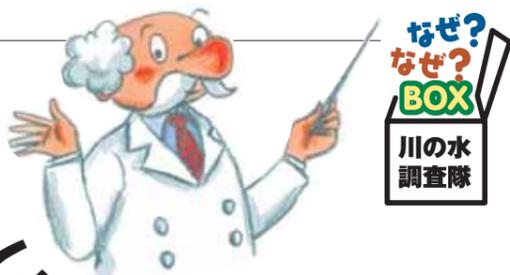
早瀬 ● これも生き物が川で暮らせる環境をだいじにする活動ですね。

博士 ● 北海道ではじまったこの取り組みは、いまでは「漁民の森づくり」として全国に広がっているんだよ。

ビオトープやネットワークづくり、森や河畔林づくりで豊かな川の自然が広がる!



川と地域の歴史的なつながりをだいにすると、どんな川が生まれるかな？



博士 ●石川県の加賀市を流れる大聖寺川は氾濫しやすい川だったが、川の流れをショートカットしたりダムを建設して洪水の少ない安全な川にした。いまでは旧大聖寺川とよばれるもとの川を舞台に、地元の人たちが古い城下町の景観や文化の保存、再生に努力している。早瀬くん、それを調べてきてくれないかな。

◎**大聖寺川**
加賀前田藩の支藩、大聖寺藩の城下町であった石川県西南部の加賀市を流れる二級河川。幹川流路延長41km、流域面積209km²。戦後、ダム建設や河川拡幅、ショートカットなどの治水事業が行われた。

◎**ショートカット**
曲がりくねって水が流れにくい部分を、まっすくにつけ替え、流れやすくなるようにつけ替えた水路。捷水路ともいう。

旧河川を再生させる人たち

早瀬 ●大聖寺のみなさん、こんにちは。旧大聖寺川の両岸は落ち着いた町なみがつづいているんですね。

浅井 ●こんにちは。ここは大聖寺藩の城下町で、その中心部を川が流れています。昔から、川べりの家は川からの風が入るように建てられてきました。暑い夏をすごしやすく暮らす知恵ですね。そんなふうに関と向き合うように町なみがつづられています。

宮 ●江戸時代には、大聖寺川をさかのぼって米や木材が運ばれてきたんですよ。1950年代くらいまでは、川の水は飲み水、炊事、洗濯、風呂に利用され、暮らしに欠かせない川でした。それがいつのまにか汚れていき、だいにされなくなりました。

浅井 ●「ふるさとの川モデル事業」として、国と県が旧大聖寺川とその支流の熊坂川、三谷川の整備を行うことになり、それをきっかけにわたしたちももう一度川を見直そうと思ったのです。

宮 ●大聖寺藩の時代から、川と町が築いてきた文化を保存、再生しようと思ったわけです。事業で水際にそって遊歩道がつけられ、川ぞいには市民の手でアジサイが植えられました。

早瀬 ●川を大切にする気持ちもどってきたわけですね。

宮 ●そうです。とてもすてきな水辺の回廊になりました。水に近づきやすい護岸や広場も整備され、水遊びの場やイベントの場になっています。

松本 ●いまは住民と市が協力して草刈りや掃除をしています。年一回の河川清掃には3,500人が集まります。ふるさとの川愛護委員会でも、清掃や草刈りをしています。

地域の活力や魅力を生み出す川

早瀬 ●親子広場をつかって、澤田さんは灯ろう流しを復活させたそうですね。

●旧大聖寺川に復活した灯ろう流し。[写真提供/大聖寺川灯ろう流し実行委員会]

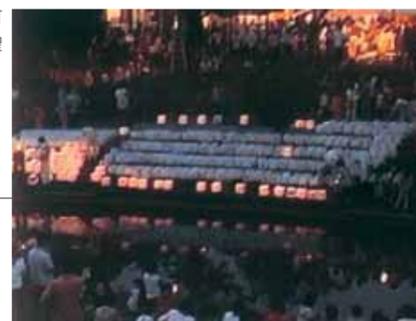
●大聖寺川の旧河川は町なかを蛇行して流れる。上が洪水防止のために拡幅しショートカットされた流路。



*大聖寺地区まちづくり推進協議会副会長の浅井澄さん、大聖寺川下りの会長の宮長二郎さん、大聖寺川灯ろう流し実行委員長の澤田淳子さん、大聖寺川等ふるさとの川愛護委員会代表の松本博一さんほかのみなさんに取材しました。



●氾濫をくり返したとは思えない静かな流れの旧大聖寺川。水に近づきやすい階段護岸や水辺の遊歩道が整備された。一部は木道の遊歩道がつけられた。



●川下りの屋形船(下)と船から見た旧大聖寺川と江戸時代につくられた長流亭(国の重要文化財)。



◎**津和野川**
島根県西部を流れる一級河川、高津川の支川。幹川流路延長37.3km、流域面積139.1km²。



●津和野川を泳ぐニシキゴイと石積みの護岸。町の歴史的景観とマッチした護岸により、すばらしい川の景観が生まれた。

●整備された水辺空間で行われた舞踏のようす。[写真提供/島根県益田県土整備事務所]

澤田 ●大聖寺川では昔から灯ろう流しがありました。わたしも子どものころの楽しい思い出として記憶しています。それが1975(昭和50)年に中止になりました。でも川の整備とともに、灯ろう流しの復活を願う声があがり、1997(平成9)年に復活しました。毎年、参加者がふえて、現在では保育園、小学校などで1,000個もの灯ろうをつくり、7月のお盆に約2,000人が集まって灯ろう流しをしています。

早瀬 ●夏の楽しい思い出になりますね。

澤田 ●大きくなってから子どものころの灯ろう流しは楽しかったと、大聖寺川の思い出にしてくれればうれしいですね。

宮 ●灯ろう流しは、大聖寺の町が川とともに歩んできた歴史をみんなに伝える大切なイベントですね。それと、大聖寺川の舟運を復活させたいと願って、屋形船での川下りをはじめました。岸から見る景色と、川のなかから見る景色ではずいぶん違います。江戸時代からの景観がとてもすてきですよ。早瀬くんもぜひ、乗ってみてください。

早瀬 ●はい。ぜひ、案内してください。

歴史的景観をいかした津和野町の川づくり

博士 ●早瀬くん、屋形船での川下りを楽しめてよかったね。

早瀬 ●はい。旧大聖寺川はたくさんの人に愛されているのがわかりました。

博士 ●島根県の津和野町でも町の文化、地域の景観に川が大きな役割をはたしているんだよ。ここでは町の歴史的な景観を川づくりにいかして、町の人にも津和野を訪れる観光客にも喜ばれている。

水菜 ●津和野というのは、町のなかをコイが泳いでいる町のこと？

博士 ●そう。この町でも「ふるさとの川整備事業」で、津和野川に散策路、階段護岸などを整備し、川に親しみやすい空間をつくった。わたしがお会いした島根県の益田県土整備事務所の担当者の方によると、津和野城の石積みにあわせた石積みで護岸工事を行ったそう。地元の人にも評判がよく、水際にはおまつり広場もつけられ、そこで伝統行事の舞踏や灯ろう流しが行われている。担当者は「それまで道路や町なみにくらべて、川には裏のイメージがありました。住民も観光客も津和野川に集まってくるようになり、町の顔になりました」といっていた。

早瀬 ●川のパワーが目覚め、みんなを引き寄せているみたいだな。

博士 ●川と町のかかわりを考えた整備が、川の魅力を生み出したわけだ。

川の楽しい記憶、住む人や町との昔からのつながりは、川がもっているパワーなんだ!



「川の可能性」を いろいろ勉強しました。 それをまとめてみましょう。

川で学ぶ思いやりの心

水菜 ● 川の水博士、荒川の「あらかわ福祉体験広場」に行ってきました。

博士 ● ほう、それでどうだった？

水菜 ● はじめて車いすに乗りました。手で車輪を回して、坂道をのぼったりするのはたいへんでした。短い時間だったけれど、体の不自由な方のご苦労がわかりました。

早瀬 ● 本荘第一病院の小松先生のお話を聞くと、車いすが必要な方にも親しめる川にしないといけないけれど、そういう方が川に行くためにはお手伝いも必要になりますね。

水菜 ● 小松先生のお話だと、そういうお手伝いは看護師の方がするそうです。わたしたちには患者の方といっしょに川で散歩したり、お話をしたり、聞いたりしてくれるとうれしいとおっしゃっていたわ。

博士 ● 先生は、病気の方や体の不自由な方への思いやりの心を、若い人たちにもってほしいと思っているんだよ。

水菜 ● 「あらかわ福祉体験広場」の目的のひとつもそういうことだそうです。

早瀬 ● 川は病気の方やお年寄りが元気をもらえる場所、そしてぼくたちが思いやりの心を学べるところにもなるんですね。

みんなが集まる川は汚せない

博士 ● わたしは、子どもたちが川で遊んでいるすがたを見ると、いつも期待していることがある。

水菜 ● えー、なんですか？

博士 ● この子たちが大きくなったら、きっと、川のもついろいろな可能性を引き出してくれるだろうと思っているんだよ。

早瀬 ● そういう試みがもうはじまっていることを勉強しました。

水菜 ● 荒川では、昔のように動物たちをとりもどそうとしています。

早瀬 ● 五行川や大聖寺川のように「ふるさとの川整備」で、川が安全になると市民が川を見直して、いろいろなアイデアで川に親しんでいますね。そして、みんなが川に集まりはじめると、川を汚さなくなります。

水菜 ● 自分たちが遊んだり、よく行く川は汚せないわ。

博士 ● 川を活用している人やグループは川の清掃にも積極的だし、浄化にも関心が高いね。ところで、早瀬くんはなにがいちばん印象的だったかな？

早瀬 ● アンダンテのみなさんの「川は地域の宝」ということばです。ぼくたちもそういう気持ちで川をだいにしていかなければいけない。



●荒川の「あらかわ福祉体験広場」。車いすの体験をとおして、お年寄りや体の不自由な人への思いやりの心を学ぶ場所として、校外授業で訪れる小中学生も多い。



●荒川ではだれもが親しめる「福祉の荒川づくり」を進めている。そのなかのふたつの拠点が岩淵地区と「あらかわ福祉体験広場」。



●高津川で遊ぶ子どもには、川を汚さない気持ちも育つ。

